

緩やかなつながりと役割を

持ちながら暮らす「住まい」

東北大震災では、多くの方が亡くなられ、現在もなお不安を抱えながらの毎日を過ごされています。仮設住宅の整備も徐々に進んでいますが、入居にあたって、テレビ報道のインタビュで聞かれたのは、隣近所の人たちが寄り集まって暮らせることでした。モノはなくなっただけでも、親しい人がいれば、声掛け合って頑張れる、そんなメッセージが届けられました。

団塊世代が高齢者になり、いよいよ本格的な「おひとり様の老後社会」が始まります。

そのための受け皿として、これまでの施設や住宅に加え、今年4月から始まったサービス付高齢者向け住宅など、さまざまな「住まい」の計画が進んでいます。

当然のことながら高齢期に向けての住まいは安心、安全の基盤に立って、必要なサービスが提供できることを念頭に置いた内容になっていきます。しかし、一方で「同じ屋根の下に住む人どうしのつながり」は二の次になっているように思います。

家族との関係性も薄れている今日では当たり前現象かもしれませんが、ひとりで暮らしているならいざ知らず、多勢の中で、孤立して生活するくらい寂しい事はないと思います。先日もある入居者の方から、電話をいただきました。「たくさんの人と暮らしているのに、何日も声を発しない日がある」と言うものでした。

もちろん全員がそうだとはいうことではありませんが、生活は満たされているけど「心は寒々」の人たちが多いこと

が気になり、被災者の方々の対照的な暮らしを思い浮かべました。

今回紹介する住まいは、「人と人のつながりを重視した小規模共同生活」の住まいです。さまざまな呼び名がありますが、ここではグループリビングとして紹介します。

グループリビングの特徴は少人数の人が、同じ屋根の下で生活し、一部の生活を共有して暮らす住まい方として紹介します。

こうした暮らし方は1970年代にヨーロッパで始まり、本格的に日本で紹介されたのは1990年代に入ってからです。当初は職場を共にする人や、長年の付き合い仲間などが、共同して住まいを建て、暮し始めたのが始まりです。

